

4章 総合問題4

問題

【1】

解答

- (1) a, d (2) b (3) c, e (4) c (5) b, d (6) c, e

解説

- (1) 下線部㉔を直訳すると「この問題は長い過去を背後に持っている」となる。つまり、ずっと以前に始まって長い間解決されないで議論されてきたということである。選択肢の意味はそれぞれ、a「この問題は長く議論されてきた」、b「この問題はすでに過去に解決された」、c「この問題は過去において秘密であった」、d「この問題はずっと以前に始まった」であり、aとdがもとの意味をほぼ表していると言える。
- (2) 第2段落では第1文 it began … society で、「18世紀末から、科学が社会を研究するための手段とならないかと検討され始めた」ことが述べられている。空所㉕を含む文はこれを受けて、「19世紀には科学が自然界を研究するのに用いた方法が(㉕)に応用された」としているので、空所には「社会」に関する語句が入ると考えられる。したがって、b「人間の事象〔事柄〕」が正解。その他の選択肢の意味はそれぞれ以下の通り。a「生物学的物体」、c「物理学的物体」、d「動物の特徴」。
- (3) ㉖.18の Then Darwin …以降にダーウィンの革命についての記述がある。まず㉖.21～22に「科学はもはや静的で時間を超越したものには関わってはならず、変化と発展の過程に関わっていた」とあるから、eの change はダーウィン以後の科学の属性である。選択肢に development はないが、cの progress (進化) がこれと同様の意味を表すので、cもダーウィン以後の科学の属性と考えられる。dの precise (厳密性) については、ダーウィン以前のニュートン理論の伝統の中で育ったパートランド・ラッセルが「(科学的手法により) 人間行動の数学的処理が、機械の数学的処理と同じくらい厳密になるだろう」と思ったとあり、ダーウィン以前から科学の属性であったことがわかる。したがって、cとeの2つが正解。
- (4) 下線部㉗の直訳は「ベリーの就任講演の後の50年は、この歴史についての見解に対する強い反動を目撃した。」となる。これはつまり、ベリーの就任講演から50年の間に、彼の見解に対する強い反動が起こった、ということの意味する。a「ベリーは就任講演の後の50年間に、この歴史についての見解に対する強い反動を見た。」ベリーが自分で見たのではないから、これは誤り。b「ベリーの就任講演の50年後にこの歴史についての見解に対して強い反動が起こった。」、d「ベリーが就任講演を行った時に、この歴史についての見解に対して強い反動が起こったのであるが、それ以来50年経った。」下線部は「50年の年月の間に…」という意味で、「50年後に」ではないし、「就任講演」と「強い反動」が同じ時にあったわけでも「それから50年経った」わけでもない。cの「この歴史についての見解に対して強い反動が起こったのは、ベ

リーの就任講演の後の50年の間であった。」だけが、下線部と同じ意味になる。

- (5) 下線部④の意味は「ベリーの見解はまれにしか引用されなかった」となり、学者などから無視されがちであったことを述べている。選択肢の意味はそれぞれ、a「ベリーの見解はだいたいにおいて評価された」、b「ベリーの見解は概して無視された」、c「ベリーの見解は受け入れられたも同然だった」、d「ベリーの見解はめったに言及されなかった」である。以上のうち、aとcは逆になっている。したがって正解はbとdの2つである。

(6)

- a 「筆者は若かった時、歴史が科学ではないと同様に、クジラは魚ではないということを知った。」「クジラが魚ではないことを知った」ことは本文に一致するが、「歴史が科学ではない」ことは、Nowadays… when I am assured…、すなわち今言われても特に悩むことはないとする。よって、若かった時に「同様に」という記述は誤りである。
- b 「すべてのヨーロッパの言語には、歴史を含む『科学』を意味する言葉がある。」ℓ. 4に In every other European language とあるように、「英語以外のヨーロッパの言語」であるから、「すべての」に誤りがある。
- c 「ダーウィンの革命によって、歴史は科学の中にもたらされた。」ℓ.19～21に「ダーウィン革命の重要性は…歴史を科学の中にもたらしたことであった」とあるので、これは一致している。
- d 「事実を集め、それを解釈するという歴史の手法は、ダーウィン以後、変化した。」第2段落ではダーウィンの革命が科学にもたらした変化について述べた後、ℓ.23～24で「歴史に対する帰納的な考え方…それを変えることは何も起こらなかった」としているため、一致しない。
- e 「コリングウッドの科学と歴史についての考え方は、ベリーの考え方と対立していた。」ℓ.29～31によると、コリングウッドは「自然界と歴史の世界との間に、はっきりとした線を引くのに特に熱心であった」とあるから、ℓ.27にある歴史を「科学以上のものでも以下のものでもない」とするベリーの考えと反対であって、この記述は一致する。

したがって、正解はcとeの2つである。

全訳

ずっと若かった頃に、私は、見かけとは違ってクジラは魚ではないということを知って、それ相当の印象を受けた。今ではこうした分類上の問題は、さほど私の心を引かない。だから歴史が科学ではないと言われても、特に悩むということはない。この用語上の問題は、英語の特異性を示している。他のどのヨーロッパの言語においても、「科学」に当たる語には、当然のこととして歴史が含まれている。しかし、英語圏では、この問題は長い過去を背後に持っている。そして、これによって生じる諸問題は、歴史を研究する手法の問題を理解するのに都合のよい導入となっている。

18世紀末に、科学が世界についての人間の知識と、人間自身の身体的属性についての人間の知識の両方に圧倒的な貢献をしていた時、科学はまた社会に関する人間の知識をさらに深いものにすることができないものだろうかと問われ始めた。社会科学の、またその中に含

まれる歴史の観念は、19世紀を通じて徐々に発展した。そして、科学が自然界を研究するのに用いた方法が、人間の事象に応用された。この時期の初頭は、ニュートン理論の伝統が一般的だった。社会は自然界と同様に、1つの機構と考えられていた。1851年に出版されたハーバート・スペンサーの著作のタイトルに、『社会の静力学』というのがあるが、今でも記憶に残っている。この伝統の中に育ったバートランド・ラッセルは、やがて「人間行動の数学的処理が、機械の数学的処理と同じくらい厳密なもの」となるだろうと思った時期のことを後に思い出している。次にダーウィンが、もう1つの科学の革命を起こした。社会学者たちは、手がかりを生物学から得て、社会を1つの有機体と考え始めた。しかし、ダーウィン革命における真に重要な事柄とは、ダーウィンが、ライエルがすでに地質学において始めていたことを完成して、歴史を科学の中にもたらししたということであった。科学はもはや静止的で時間を超越したものには関わっておらず、変化と発展の過程に関わっていた。科学の進化は、歴史の進歩を確実にし、補足した。しかしながら、歴史を解釈する手法の帰納的な考え方、つまりまず事実を集め、次にその事実を解釈する手法であるが、それを変えることは何も起こらなかった。この手法がまた科学の手法でもあることは、疑いようもなかった。これはベリーが、彼の1903年1月の就任講演の締めくくりの言葉の中で、歴史を「科学以上のものでも以下のものでもない」として説明した時、明らかに心に描いていた見解であった。ベリーの就任講演の後50年間に、この歴史についての見解に対する強い反動があった。コリングウッドは1930年代に書いているのであるが、科学的調査の対象である自然界と歴史界との間に、はっきりとした線を引くのに、特に熱心であった。そして、この時期にはベリーの説は、嘲笑の言葉をもって以外には、めったに話題になることはなかった。しかし、当時の歴史家たちが気づけなかったことは、科学それ自体が重大な革命を経験したということだった。これによって、ベリーの方が人々の思っていたよりも、その論拠は間違っていたにせよ、正しかったと言えるのかもしれない。

注

- ℓ. 1 ◇ suitably 「適切に；ふさわしく」
- ℓ. 2 ◇ notwithstanding 「～にもかかわらず」
- ℓ. 3 ◇ unduly 「過度に」
- ℓ. 4 ◇ terminological 「術語（学）の；用語上の」
◇ eccentricity 「風変わり；奇抜」
- ℓ. 8 ◇ triumphantly 「勝ち誇って；意気揚々と；大得意で」
- ℓ. 10 ◇ attribute 「属性」
◇ further ～ 「～を促進する〔進める〕」
- ℓ. 14 ◇ prevail 「（もの・事が）普及する；流布する；（広く）行われている」
- ℓ. 19 ◇ cue 「きっかけ；手がかり」
- ℓ. 21 ◇ geology 「地質（学）」
- ℓ. 23 ◇ complement ～ 「～を補足する〔完全にする〕」
- ℓ. 26 ◇ evidently 「明らかに；確かに」
- ℓ. 32 ◇ derision 「嘲笑」
- ℓ. 33 ◇ profound 「深刻な；難解な」

[2]

解答

- (1) The older one grows, the more silent one becomes
 (2) ① feels ② will receive ③ may take ④ seems to overflow
 ⑤ become ⑥ become ⑦ felt ⑧ leaves
 (3) **b** (4) were
 (5) 「全訳」の下線部①参照。
 (6) soul (7) 最愛の妻 (または夫)
 (8) 自分の世界
 (9) As one grows older one becomes more silent.
 (10) 若いうちは、世界中の誰とでも同化できると思い心をいっぱいに関くが、やがてそれが不可能と知り、対象を1人にしぼって、同化しようと最後の努力をするが、それもかなわぬ夢とわかり、人は他の人に働きかけることをやめ、ただ黙って自分の殻に閉じこもる。(119字)

解説

- (1) ○比較級と共に用いられた as は「～するにつれて」の意になることが多く、本問がそれにあたる。
 ○その場合、'the 比較級～, the 比較級…'で書き換えることができる。
- (2) ○設問①～⑧は、客観的事実と主観的事実が時制や表現形式の中でどう違って現れるかを理解してもらいたいと思って出題されたもの。
 ○全体を読めばわかる通り、この文は、青年、壮年、老年などという年代を超越した視点から、人間のそれぞれの年代を (もちろん、この年代は年齢とは関係なく、精神的な年代である) 平面的に眺めているから、どの年代も一種の客観的真理ととらえて「現在時制」で書かれている。
 ○したがって、客観的事実を述べている②, ⑥, ⑧は、それぞれ feels, become, leaves と現在形を用いなければならない。
 ○ところが、③, ④, ⑤, ⑦は、筆者によって客観的にとらえられている one の主観的な推測であり、また願望であり、判断である。
 ○したがって、③は will receive となり、④は so that …との関連からも may [can; will] take となり、⑤は seems to overflow, ⑦も (seems to) become となるのである。
 ○そして、これらが、単なる主観的な推測・願望・判断にしかすぎなかったからこそ、人は年をとるにつれて寡黙になるのである。
 ○なお、⑧は時間の過去を示すために felt と過去形にすればよい。
- (3) ○空所以降の文に he is always a stranger to one が出てくることや、全体の要旨を考えれば、good friends や great friends などの表現が入らないことは明らかであるが、one is a stranger to them と they are strangers to one のどちらを選べばよいだろうか。
 ○ここは、他人の働きかけを自分が拒否しているのではなく、自分が働きかけている

のに他人が応じてくれないことを述べているのであるから, one is a stranger to them ではなく, they are strangers to one を選ばなければならない。

- (4) ○ as it were = so to speak 「いわば」
○ この意味では as it was とはならない。
- (5) ○ with all *one's* might 「あらん限りの力で」
○ might = power ; strength
○ one draws him to one
○ trying to

{	know him
	and
	be known by him

○ right = directly
○ one finds that

{	it is all impossible,
	and
	however ardently one loves him,
	however intimately one is connected with him,

 - ▶ he is always a stranger to one

○ 'A and [M] B' のパターン。

- (6) 例外的に every three *days* のように複数形がくるが, every のあとには単数名詞がくる。したがって「どの…も」の意の単数名詞の中から選ぶ。every living thing は「生き物すべて」を意味する。ここでは「対人間」の関係を述べているので, これでは少々大袈裟。living soul = person である。したがって, ここは every living soul (あらゆる人間) となる。
- (7) the person one loves best が, the most devoted husband and wife と無関係でないことは想像が出来よう。つまり one が「男」なら, the person one loves best はその妻であり, 「女」ならその夫である。下線部①で, one person を he で受けて, one finds that … he (= one person) is always a stranger to one となっているから, これは「男同士」の話だなどと考えるは大間違いである。「女同士」でも「男と女」でもよいのである。
- (8) この it は, 直接的には, すぐ前の *a world of one's own* を受けている。
- (9) 段落の冒頭を確認すること。
- (10) 冒頭の 1 文と ℓ. 6 But に続く内容, ℓ. 13 Then に続く内容に注目する。

全訳

人は年をとるにつれて寡黙になっていく。若い時には, 人は自分を世間にさらけ出したくてうずうずする。つまり, 他の人々に強く親しみを感じ, その腕の中に自分を投げ込みたいと思うし, 彼らの方も自分を受け入れてくれると感じるのである。彼らが自分を受け入れてくれるように自分の心を他の人々に開きたいと思ひ, 彼らの心の中へ入っていきいたいと思うのだ。自分の命が他の人の命の中へと溢れ出て, ちょうどいくつもの河の水が海で1つになるように, 自分の命が他の人々の命と1つになるように思えるのだ。しかしやがて, 人が感

じていたこういったことすべてをする力は消えていく。自分と他人との間に障壁が出来てきて、彼らは自分とは無縁な人なのだとということがわかってくる。そこで、もしかすると、人は自分の愛のすべてを、自分のありったけの能力を1人の人物の上に集め、いわば、自分の魂をその人の魂と合わせようと最後の努力をするかもしれない。①全力を尽くして、人は相手を自分に引き寄せ、相手を知ろうとし、自分の心の奥底まで相手に知ってもらおうとする。しかし、少しずつ、人はそれがかなわぬ夢であることに気づき、どんなに激しく相手を愛しても、どんなに親しく関係を持っても、相手は変わらず無縁の人なのだと気づく。どんなに深く愛し合っている夫と妻でもお互いを知りはしないのだ。そこで、人は自分の心の中にひっこみ、沈黙の中に自分だけの世界を築き、その世界をどんな人の目にも、自分が最も愛している人の目にさえも触れないようにし、どうせわかってくれないことを知っているの、見せないのである。

【3】

解答

- (1) b (2) c (3) b (4) c (5) c
 (6) d (7) b (8) c (9) b (10) d
 (11) c (12) d (13) b (14) d (15) d

解説

- (1) 「彼は毎回会議に出席する必要があるのか。」
 ○ have to … 「…する必要がある」の疑問形。
 a 助動詞 need は動詞の原形をとるので不可。
 c 助動詞 must は動詞の原形をとるので不可。
 d 一般動詞 need は to 不定詞をとるので不可。
 e have がなければ可。また、Should he have *attended* the meeting every time? ならば「彼は(実際にしたのだが)毎回会議に出席するべきだったか」の意を表し、可。
- (2) 「私はしばしば君に本分を尽くすよう言ったが、君は私の言うことを聞こうとしなかった。」
 ○ would not … 「どうしても…しなかった」「過去の固執・拒絶」を表す。
 ○ do *one's duty* 「本分を尽くす」
- (3) 「メアリーは今そんなに踊らないが、以前はずいぶんと踊っていたことを私は知っている。」
 ○ used to … 「よく…したものだ」「現在との対比で用いる過去の習慣的行為・状態」
 a be used [accustomed] to …ing 「…するのに慣れている」
 c would にも過去の習慣的・反復的な行為を表す用法があるが used to のように現在との対比では用いない。また過去を表す文脈や語句を必要とする。
- (4) 「お元気なことと思います。」
 ○ 「祈願」を表す may。
- (5) 「機会があった時に私たちがトムを訪問しなかったのは残念なことだ。彼が国を出る前に彼に会いたかったのだが。」

- would like to have 過去分詞「…したかった (のにできなかった)」
 ○ it's a pity (that) … 「…は残念なことだ」
- (6) 「ただちに出た方がいい, さもないと遅れてしまうだろう。」
 ○ had better … 「…した方がよい」
 主語が2人称の場合は, 忠告・命令・威嚇等の強制の意味も表すので, 通例目下の人に用いる。
 ○ right away 「ただちに」
 ○ or 「さもないければ」
- (7) 「君はそこに行くべきではなかったのに (行った)。」
 ○ had better not have 過去分詞「…すべきではなかったのに (…した)」
 否定語は better の直後に置く。時制が現在ならば had better not … となる。
- (8) 「これは大変重要な会議だ。君は欠席すべきではない。」
 ○ ought to … 「…すべきだ」〔義務〕
 助動詞 should とほぼ同じ意味だが, should より強い。否定語 not は to 不定詞の前に置く。
 a had better not ならば○。
 b, d 助動詞 have が問題文の miss (原形) につながらない。
- (9) 「今晚とりたててすることがないと言うんだから, 私たちと一緒に来る方がいいよ。」
 ○ might [may] as well A (as B) 「(Bするくらいなら) Aする方がよい」
 ○ have nothing (better) to … 「(とりたてて) …することがない」
- (10) 「あなたはパーティーに来るべきだったのに。きっと気に入ったと思うわ。」
 ○ should [ought to] have 過去分詞「…すべきだったのに (しなかった)」
- (11) 「その手紙を受け取っているはずだったが, 届かなかった。」
 ○ should have 過去分詞「…したはずだ」〔完了の推量〕
- (12) 「私の妹は今頃ここに到着しているはずだ, というのは彼女は早い列車に乗ったからだ。」
 ○ ought to have 過去分詞「…したはずだ」〔完了の推量〕
- (13) A: 「図書館から借りた本が私の事務所からなくなっている。」
 B: 「ピーターが図書館に返したに違いないよ。」
 ○ must have 過去分詞「…したに違いない」〔過去の強い推量〕
- (14) A: 「財布をなくしたの?」
 B: 「いいや, そんなことしたはずはない。」
 ○ cannot have 過去分詞「…したはずがない」は‘過去の可能性・推量の否定’を表す。
 a, c must not → 「…してはいけない」は‘禁止’を表す。
- (15) 「『あなたがそんなに手早く宿題を終えたはずはないわ』とリサは言った。」
 「『いいや, 終わったんだ。見てよ』とベンは彼女にノートを見せた。」
 I () は I finished my homework quickly のことを意味している。この finished 以下を助動詞 do で受け, 時制は過去なので did にする。

【4】

解答

(1) In order to do things well, you really have to be interested in what you are doing.

別解 If you want to do things well, it is necessary to be really interested in what you are doing.

(2) Because of the bad road conditions, I arrived at my destination much later than I had planned.

別解 Due to the bad road conditions, I got to my destination much later than I was supposed to.

(3) I have long wanted to go to Europe, but something always happens and interferes with my plans.

別解 I have wanted to travel to Europe for a long time, but something always gets in the way of my plan.

(4) I wonder why I have to put off the things I really want to do because of other things that I have to do.

別解 Why is it that we have to put off doing what we really want to do in order to do what we must do?

(5) When you find yourself surrounded by people who speak a language totally unfamiliar to you, you will first feel that you are hearing meaningless noise.

別解 Anyone hearing a language he doesn't know at all will often feel at first as if he is hearing meaningless sounds.

(6) When tourists visit a foreign country, they often find they cannot understand words they learned back home.

別解 You may learn a foreign language at home, but when you first visit the country where it is spoken, you will often find it impossible to understand it.

解説

(1) 文全体の主語は、総称の you, または we が自然。日本語の読み換えは特に必要ない。「物事をうまくやるためには」は不定詞, in order to ..., または, if 節にすることもできる。「自分がやっていること」は、関係代名詞 what を使って, what you are doing とする。

(2) 「道路が悪かったので」は、そのまま because the roads were (in) bad (conditions) としてもよいが、because of [due to] the bad road conditions のような副詞句にすると、すっきりとする。

○「目的地に着く」は arrive at [get to] one's [the] destination.

「予定よりだいぶ遅れて」は「予定していたよりもずっと遅く」と考えて、much later than I had planned [I was supposed to] のように表すことができる。

(3) 「私はずっと…したいと思ってきた」は、現在完了を使って、I have long wanted to ..., I have wanted to ... for a long time とすればよい。

「私の計画を邪魔する」は interfere with my plan [plans], get in the way of my

plan [plans], stop me from realizing my plan [plans] など。

- (4) 全体の構成は、日本語通り、Why is it that …? とするか、あるいは、I wonder why … と間接疑問文にすることもできる。

「しなければならないことのために、本当にしたいことを先に延ばす」は、英語では順序が逆になる。

○「～を先に延ばす」は put off ～

○「本当にしたいこと」は what I really want to do

○「しなければならないこと」は what I have to [must] do。また、文全体の主語を I の代わりに we で統一してもよい。ただし、I wonder は we wonder とはしない。

- (5) 英文の構成は、日本語通り「…する人は誰でも…と感じる」と考えて、Anyone who … feels that [as if] … とするか、**解答**のように「…すると（人は）…と感じる」と解釈して、When you …, you will feel that [as if] … とする。

「まったくなじみのない言葉を話す人々の中に入る」は、**解答**のように「まったくなじみのない言葉を話す人々に囲まれる」、あるいは**別解**のように「まったく知らない言葉を聞かされる」と解釈するとよい。

「…と感じる」は feel that …, feel as if …のどちらでもよい。

「意味のない雑音を聞く」は hear meaningless noise [sounds] とする。全体の主語は、you, they, または he (anyone who … で始める場合) で統一すること。

- (6) 英文全体の構成をどうするかがポイント。「…ということはよくある」という日本語を尊重して、it often happens that …としてもよいし、「人は（旅行者は）よく…ということがわかる」と解釈して、When you [tourists] …, you [they] often …とすることもできる。

「自分たちが母国で学習した言葉」は、the language [words] you [they] learned back home のようにそのまま訳せばよい。または、**別解**のように、「母国で外国語を学習するが、それが話されている国へ初めて行くと理解できないことがよくある」というように、やや意識することも可能。

【5】

解答・解説

- (1) should

「理論と実践は相伴うべし。」

○この should は‘義務’を表す。

○go hand in hand 「手に手を取って行く」

- (2) used to

「彼女は昔は彼を愛していたが、今では彼を嫌いなようだ。」

現在との対比を表す過去の状態（状態動詞）は used to を用いる。

- (3) mustn't

「君はマッチをすってはいけない。部屋にはガスが充満している。」

‘禁止’を表すのは must not。needn't は「不必要」を表す。

(4) don't have to

「今行かなければいけない?」「いや、その必要はない。」

この場合 don't have to … 「…する必要はない」がふさわしい。

(5) were able to

「2時間漕いで、我々はその湖を渡れた。」

「単一動作の実行」を表す場合は、could ではなく were able to を用いる。

(6) didn't, may not

「彼が町にいた間にどうして私を訪ねてくれなかったのかわからない。彼はそうする時間がなかったのかもしれない。」

「彼が町にいた間」という過去のことを表すので didn't がふさわしい。

‘過去時の事柄に対する推量’を表すのは may have 過去分詞。

(7) can't

「彼はたった今出かけたばかりなので、そんなに遠くに行っているはずはない。」

‘強い否定の推量’を表す用法。can't (…のはずがない) ⇔ must (…に違いない)

(8) have finished

「私が仕事を終える頃までには雨が降りやむだろう。」

「時や条件を表す副詞節の未来完了の事柄は、現在完了形で表す」という原則に従って have finished を選ぶ。

(9) called

「たった今彼に電話したところだ。」

just now は通例現在完了形とともに用いない。

「たった今」の意では過去形, 「ちょうど今」の意では現在形, 「今すぐ」の意では未来を表す表現。

【6】

解答

(1) c (2) b (3) b (4) a (5) a

解説

(1) A: 「ピーターが出て行った時、雨が降っていたかい。」

B: 「そうだったに違いないよ。さもなければ彼は傘を持って行かなかっただろう。」

○ must have 過去分詞 「…したに違いない」

○ he wouldn't have taken his umbrella が仮定法過去完了の帰結節で、その条件になるものが空所に入る。

○ otherwise = if it had not been raining when he went out,

(2) 「ウィリアムがいなかったら、その道を発見することは決してなかっただろう。」

○ () William が仮定法過去完了の条件を表す。

○ without ~ = but for ~ = if it had not been for ~ 「~がなかったならば」

[= If it had not been for William, …]

cf. without ~ ; but for ~ ⇔ with ~ (～があれば)

- (3) 「君がそのようなひどい風邪を引いていなければよかったのに。だってきっと (風邪を引かなかつたら), ロック・コンサートを楽しんだだろう。」

○ wish + 仮定法過去完了 で ‘過去の実現しなかった願望’ を表す。

- (4) 「彼らの車は故障したに違いない。さもなければ我々の客はずっと前に到着しているはずだ。」

our guests would have arrived long ago が帰結節で, その条件になるものが空所に入る。

otherwise = if nothing had gone wrong with their car,

- (5) 「もし当時彼の援助がなかったら, 私は今これほど成功していないだろう。」

○ 帰結節は仮定法過去だが, 条件節は in those days と過去のことについての仮定となっているので仮定法過去完了にする。「～がなかったら」の意味を表すものは, if it had not been for の if の省略された形で倒置されている a になる。

b unless を仮定法で用いるのはまれであり, また I had だと文脈にも合わないため不可。

c not の後に been が抜けている。

d 仮定法過去だから不可。

【7】

解答・解説

◆は『解体英熟語 改訂第2版』の参照番号を示す。

- (1) (A) persisted (B) in ◆148

○ persist in ~ 「～に固執する」

cf. insist on ~ (～を要求する) ◆149 と前置詞を混同しないこと。

- (2) (A) go (B) with ◆151

○ go with ~ 「～と調和する [一緒に行く]」

- (3) (A) dispense (B) with ◆156

○ dispense with ~ 「～なしで済ます」 ≡ go [do] without ~

- (4) (A) do (B) with ◆157

○ do with ~ 「～を処理する」 cannot do with ~ で 「～に我慢できない」。

- (5) (A) done (B) with ◆158

○ have [be] done with ~ 「～を終える」

- (6) (A) refrain (B) from ◆162

○ refrain from ~ 「～をこらえる」

- (7) (A) suffering (B) from ◆163

○ suffer from ~ 「～で苦しむ」

- (8) (A) referring (B) to ◆169

○ refer to ~ 「～に言及する」

cf. refer to A as B (A を B と呼ぶ)

- (9) (A) see (B) to ◆ 170
 ○ see to ~ 「～に気をつける」 to は前置詞。see to it that 節で「…するように取り計らう」。
- (10) (A) take (B) to ◆ 173
 ○ take to ~ 「～が好きになる」 to は前置詞。
- (11) (A) object (B) to ◆ 179
 ○ object to ~ 「～に反対する」 to は前置詞。
- (12) (A) added (B) to ◆ 180
 ○ add to ~ 「～を増す」
cf. add A to B (BにAを足す)
- (13) (A) amounted (B) to ◆ 181
 ○ amount to ~ 「～に等しい」 (= add up to ~ ; be equal to ~)
 ○ amount の名詞としての意味は「量・総計」。
- (14) (A) came (B) to ◆ 182
 ○ come to *one's* senses 「意識を取り戻す」
 ※ 「意識を取り戻す」なら come to が普通。その場合の to は副詞で「正常な状態へ」の意味。
- (15) (A) lead (B) to ◆ 183
 ○ lead to ~ 「～に通じる」 (= cause ~ ; bring about ~ ; give rise to ~)
- (16) (A) broke (B) into ◆ 185
 ○ break into ~ […ing] 「急に…し始める；～に侵入する」
 ※ burst into …ing は, break into …ing よりも, 「予想外」という意味合いを含む。
- (17) (A) come (B) of ◆ 189
 ○ come of age 「成人に達する」
- (18) (A) approve (B) of ◆ 190
 ○ approve of ~ 「～をよいと認める」
- (19) (A) send (B) for ◆ 198
 ○ send for ~ 「～を呼びに人をやる」 (= call in ~)
- (20) (A) calls (B) for ◆ 199
 ○ call for ~ 「～を必要とする」 (= require ~ ; demand ~ ; need ~)

5章 総合問題5

問題

【1】

解答

- (1) 「全訳」の下線部①参照。
- (2) ①空気中を伝わる音 ②地面を伝わる振動音
- (3) (A) **b** (B) **c** (C) **c** (D) **b**
- (4) 「全訳」の下線部③参照。
- (5) 空気中を伝わる波動ほどすぐに消えないこと。(21字)
天気や気温の変化に影響されないこと。(18字)
うっそうとした密林の葉に吸収されないこと。(21字)
- (6) ①空気中を伝わる音の方が地面を伝わる振動音よりも速く到達するから。(32字)
②仲間からの距離が測れること。(14字)
- (7) キャッチした振動を増幅する働きを持つと思われる脂肪分が、頬に蓄えられていること。

解説

- (1) elephants communicate at a frequency

↑

<(which is) typically too low for the human ear to perceive >— about twenty hertz

○ at a frequency (which is) typically too low for the human ear to perceive と補ってもよい。too ~ to … (～すぎて…できない) の構文。perceive ~ (～を感知する) の目的語が a frequency という関係になっている。「通常低すぎて人間の耳には聞き取れない周波数で」という意味。ダッシュの後に周波数の具体的な数字が示されている。

- (2) 下線部のすぐ後にコロンのがあるので、具体的内容がコロンの後に書かれているはずという察しはつくだろう。つまり、the airborne one and another that travels through the ground as a seismic wave が該当箇所になる。まず1つは the airborne one であるが、airborne の borne が bear (～を運ぶ [持って行く]) の過去分詞形であることから、「空気で運ばれた音」、すなわち「空気中を伝わる音」の意であることがわかるだろう。もう1つの another that travels through the ground as a seismic wave では seismic の意味がとりづらいたろうが、「seismic wave として地面を伝わるもの」という内容であることを押さえた上で、その後の文脈をヒントに推測してみよう。少し読み進めると seismic waves generated by an elephant stomping its feet in alarm travel farther still (象が驚いて足を踏みならしてできる seismic waves はさらに遠くまで伝わる) とあり、さらに第4段落では seismic communication の例として、さまざま生物が地面を揺らすことでメッセージを相手に送ることが紹介されている。よって、もう1つの音は「地面を伝わる振動音」であることがわかる。

- (3) 下線部を含むすべての発音記号は次の通り。なお、(D) の a については i の母音が子音に吸収されて記号上には出ない。

(A) creatures [kri:tʃərz]

a crater [k্রেটər] b feature [fi:tʃər] c recreation [rèkriéiʃən]

(B) cues [kjú:z]

a acoustic [əkú:stik] b key [ki:] c queue [kjú:]

(C) gauge [géidʒ]

a vocal [vóukl] b water [wátər] c wave [wéiv]

(D) marine [mərɪn]

a medicine [médəsn] b perceive [pərsí:v] c vibrate [váibrət]

- (4) She observed that planthoppers in the peanut gallery would lift a foot or two, presumably for better hearing:

↑ 理由

the other feet, bearing more weight, thus became more sensitive to vibration

○ 下線部を含む段落もすぐ前の段落同様、振動（地震波）によるコミュニケーションに関するものである。planthoppers についてはカタカナで「プラントホッパー」と書くという指示があるが、この段落の1行目の planthoppers, tiny insects である程度のイメージは湧くだろう。

○ peanut gallery については脚注がついているが、「劇場のステージから遠く離れた座席」をこの場合はどう訳すか悩むところだが、文脈から判断してここでは「音の出所から離れていてよく聞こえない場所」のことを言っていると考えられる。また、lift a foot or two がなぜ better hearing につながるのかというのも重要なポイントで、その理由がコロンの後、the other feet, bearing more weight … に記されていることを読み取る力が要求される。足を1本ないし2本持ち上げることで、その分だけ残りの足に体重が余分にかかり、地面との接触度が増すことで振動音を聞き取る力が増す、つまり、振動に対してより敏感になる (became more sensitive to vibration) ということである。

○ would は‘習性’を表す助動詞 will が‘時制の一致’で過去形になったもの。

- (5) 下線部直後の文 (They dissipate less quickly than airborne waves, they aren't disrupted by changes in weather or temperature, and they aren't swallowed by dense jungle foliage.) に advantages の内容が3つ具体的に述べられているので、それぞれをまとめればよい。冒頭の They は seismic waves を指す。dissipate とは「消散する (= gradually become weaker until it disappears)」の意。disrupt ~ は「~ (= 通信など) を混乱させる [中断させる] (= make it difficult for something to continue in the normal way)」, foliage は「葉 (= the leaves of a tree or plant)」。

- (6) 下線部の意味は「信号間のズレが固有の利点を与えているかもしれない」。

- ① 信号間のズレが生じるのは、前文に Air is the faster medium : an airborne elephant call will reach a distant listener before the seismic version does. (媒体としては空気の方が速い。空気中を伝わる象の鳴き声は、地震波によるものよりも先に遠くに

聞き手に到達する。)とあるように、伝わる速度が違うからであり、そのため、ある地点に到達するのにズレが生じるのである。

② advantage の具体的内容は下線部のすぐ後の The delay increases with distance ; an astute listener would soon learn to gauge distance from the delay. (距離が増すにつれて、そのズレも大きくなる。鋭い聞き手ならそのズレから距離を割り出す手だてをすぐに見つけるだろう。)に記されている。つまり、仲間からの距離を割り出すことができるというのが利点である。

(7) 下線部の意味は「象の解剖学的構造の奇妙な特徴のいくつか」で、その具体的内容は including の後に示された the fatty deposits in its cheeks であるが、前後に目を配れば理解が深まるであろう。まず地面の振動という形で送られてきたメッセージは足から内耳へと骨を伝わって到達する (the seismic vibrations propagate from the elephant's feet to its inner ear — a process known as bone conduction)。これで説明がつくのが象の解剖学上の不思議な特徴である the fatty deposits in its cheeks だが、これがあるおかげで入ってくる振動が増幅される (which may serve to amplify incoming vibrations)。これは、海洋哺乳動物の場合は「音響脂肪」(acoustic fat) と呼ばれている。要は、頬の脂肪が音を増幅する働きがあるということ。deposit とは「堆積されたもの；蓄えられたもの」の意。

全訳

閉館後アメリカ自然史博物館を出る際、私は時折、エークリー記念アフリカ哺乳類館の象の前を通り過ぎる。それらは部屋の中央部を占拠している。象の一群が幅広い壇上で、剥製のまま永遠に動き回っている。彼らと私と、ガラス製の義眼をはめた有蹄類の動物を展示したサバンナを除けば、ホールは空っぽだ。私の足音しか聞こえず、その音も象の巨体によって幾分増幅されているように思える。

私たち、つまり象と私は、いつもの無言の対話を交わしているが、最近になってやっと象たちが何を言いたいのかがわかるようになった。何年も前から科学者たちは①象は、約 20 ヘルツという、通常人間の耳には低すぎて聞き取れない周波数で意思の疎通をはかっていると了解してきた。これらの鳴き声は空気中を進み、5マイル離れた象に達することができる。もっとよく聞き取れるようにと、聞き手は自分の耳覆いを前方に広げ、頭部をうまくパラボラアンテナに変える。

後からわかったことだが、これでは話半分にすぎない。最近、スタンフォード大学の研究者ケイトリン・オコネル・ロッドウェル氏は、象の鳴き声は実は2つの別々の音を作り出していることを発見した。つまり、空気中を伝わる音と、もう1つ地震波として地面を伝わる音である。しかも、地震波の方は空気中を伝わる音の少なくとも2倍遠くまで伝わり、象が驚いて足を踏みならして生じる地震波はさらに遠くまで、最大20マイル先まで伝わる。しかし、最も注目し値するのは、象がどのようにしてこの信号をキャッチすると考えられるかだが、彼らは足で聞き取っているように思えるのだ。

地震波によるコミュニケーションは一般に広く知られている。サソリからワニに至るまでのさまざまな生物が、交尾相手になりそうなものを見つけたり、餌食を探し出したり(また、自分が餌食になるのを回避したり)するのに地面の振動に頼っている。オスのシオマネキは

並外れて大きなハサミで砂を叩いて自分の縄張りだという威嚇の信号を送る。メクラネズミは地下のトンネルの壁に頭を打ち付けることで、2つ向こうのトンネルにいるメクラネズミに自分の優位を宣言する。もっとも相手が自分の頭を壁に押しつけてそれを聞いているかどうかは定かではないが。

オコネル・ロッドウェル氏は、それまでの研究生活でも初期に研究した小さな昆虫、プラントホッパーの地震波の歌から最初にヒントを得た。プラントホッパーは腹部を振動させて歌う。そしてこれがもとで足下の葉っぱが、そして理想を言えば近くにいるプラントホッパーすべてが振動する。◎観察して彼女が気づいたのは、離れた場所においてよく聞こえないプラントホッパーが、おそらくよく聞き取れるようにするためだろう、足を1, 2本地面から浮かせる。すると残りの足により大きな体重がかかるために振動に対してより敏感になるということだ。後年、オコネル・ロッドウェル氏はナンビアの水飲み場にいる象の間によく似た行動を目撃した。第2群の象が到着する何分も前に、第1群の何頭かがまるで何かを期待するかのように、前足に体重をかけて前傾姿勢を取り、後ろ脚を1本上げたものだ。「それはプラントホッパーがしていたのと同じことだったの」と彼女は言う。

果たしてそうだろうか。オコネル・ロッドウェル氏が行ったいくつかの的確な実験によると、象は確かに長距離まで達する地震波信号を出している。しかしそれは他の象に聞こえるのだろうか。北部カルフォルニアのオークランド動物園で、ドナという名前の象が地震波信号だけに反応するように訓練されているが、そこで得られた初期の証拠によると、この答えはイエスであることが強く示されている。オコネル・ロッドウェル氏は「最終結論はまだ出てないけれど、十分期待できそうなものよ」と言っている。

コミュニケーションの媒体として、地震波は象にいくつかの利点を与えるものだというところに彼女は言及している。地震波は空気中を伝わる波動ほどすぐには分散しないし、天気や気温の変化によって攪乱されることもないし、ジャングルのうっそうと茂った葉に吸収されることもない。複雑な声の倍音は地震波にはうまく変換されない。しかし、例えば「ここだよ」とか「危ない！」など、(地震波を用いた)最も単純な長距離メッセージでも、高度だがまったく聞きとれないメッセージよりましだ。

媒体としては空気の方が速い。空気中を伝わる象の鳴き声は、地震波によるものよりも先に遠くにいる聞き手に到達する。しかし、信号間のズレが固有の利点を与えているかもしれないと、オコネル・ロッドウェル氏は提唱している。距離が増すにつれて、そのズレも大きくなる。鋭い聞き手ならそのズレから距離を割り出す手だてをすぐに見つけるだろう。地震波による信号を、空気によって運ばれる信号と組み合わせれば、動物は自分の動きを遠く離れた仲間と調整して、より効果的に餌を集め、目に見えない危険を察知することができるだろう。それは、コンパスと物差しとEメールを1つにしたようなもので、象向きのパームパイロットだ。

しかも象の足裏(パーム)が鍵になると、オコネル・ロッドウェル氏は考えている。おそらく地震波の振動は象の足から内耳へと伝わるのだろう。つまり、骨伝導として知られている過程だ。それで象の解剖学的構造の奇妙な特徴のいくつかの説明がつくと考えられる。この特徴の中には象の頬の脂肪の固まりも含まれており、それが入ってくる振動を増幅する役割を果たしているのかもしれない。海洋の哺乳動物の場合は、同様の固まりは「音響脂肪」と呼ばれている。

注

- ℓ. 1 ◇ after hours 「閉館〔閉店〕後に」
cf. opening hours (開館〔営業〕時間) / visiting hours ((病院などの) 面会時間)
- ℓ. 3 ◇ milling eternally in the state of taxidermy : mill とは「(家畜, 群衆などが) ぞろぞろ動き回る」様子をいう。taxidermy とは脚注にあるように「剥製術」の意。全体で「剥製の状態で永久に動き回っている」の意。
- ℓ. 6 ~ 7 ◇ only lately have I come to understand what they have to say : only が付いた副詞句 (only lately) が文頭に出て have I come と倒置を起こしている。what they have to say は「彼らが言わなければならないこと」ではない。what は, say ではなく have の目的語。ここは「彼らが言いたいこと」と解釈する。
- ℓ. 9 ◇ propagate 「広まる; 波及する (= spread)」
- ℓ. 12 ◇ as it turns out 「後でわかったことだが; たまたまわかったことだが」
- ℓ. 16 ◇ in alarm 「驚いて」
- ℓ. 21 ◇ fiddler crab 「シオマネキ」
- ℓ. 25 ◇ planthopper : ヨコバイ科と呼ばれる昆虫で, イネヤトウモロコシの害虫。
- ℓ. 34 ◇ elegant experiment : elegant は「(考え・計画などが) (科学的で) 的確な」の意。
- ℓ. 42 ◇ vocal harmonics : 倍音の原理を利用して得られる, フラジレット音 (喧噪の中でも響き渡る, 鋭く甲高い音響をもつ) に似た音。この文脈で筆者が言いたいのは, よく通る音声でも振動音にはうまく変換できないので, 遠くまで到達しない。だとすれば, 単純なメッセージしか伝えられないけれども遠くまで届く振動音の方がましだ, ということ。
- ℓ. 51 ◇ an elephantine Palm Pilot : Palm Pilot とは「米国 3Com 社の個人用携帯情報ツール」。象が振動音を足裏でキャッチすることから palm (手のひら) に引っかけて洒落ている。すぐ後の段落の冒頭で … the elephant's palm is the key という記述もある。また, elephantine は通常「大きくて不格好な」という否定的な意味を持つ形容詞だが, 本文の内容からは否定的なニュアンスは感じ取れない。COBUILD の説明を引用すると, Something that is *elephantine* resembles or is suitable for an elephant, for example by being rather clumsy or by being very large and easy to see. となっており, この中の suitable for an elephant 及び very large and easy to see が肯定的な意味を持つので, ここでは「象向きのパームパイロット (携帯情報ツール)」と訳した。
- ℓ. 54 ◇ conduction 「(音・熱などの) 伝導」

【2】**解答**

- (1) 教育を受け, 社会的地位のある人々。
- (2) 今よりは, はるかに早くいわゆる標準英語なるものを身につけることができるであろうと考えられるということ。
- (3) 文法家の規定した規則を間違いなく守っている英語。

- (4) perfect English (5) grammarians (6) respectable
 (7) no (8) usage (9) the laws of grammar

解説

- (1) ○ such people とは、すぐ前の people of education and standing in the community であることは理解できるであろうが、people of education は「教師」ではない。
 ○ people of education, educated people で「教育を受けた人々」である。
 ○ of は「所有」の意で、次の standing にも続く。
 ○ standing は position (地位；身分) の意。
- (2) ○ get along (much faster) の次に何が省略されているか考えないと正しい答えは出てこない。しかし、get along *with other people* (他の人々と仲よくやっていく) のように other people が出てくるような展開ではない。get along with it (= standard English) である。
 ○ したがって get along は be friendly の意ではなく、make progress の意である。
- (3) ○ “perfect English” というものは、そもそも存在しない (There just isn't any such thing. Even our best speakers do not all use the language in the same way.) と言っているし、さらに続きを読めば、おのずから「完全英語」とはどんなものかわかるはずである。
 ○ つまり、「文法家の作った規則通りに使われる英語」である。
- (4) ○ such thing は、もちろん perfect English である。
- (5) ○ best speakers は、(3) のところの perfect English と関連して考えれば、grammarians と出てくるはず。なお複数にすることを忘れないように。
- (6) ○ respect の派生語は非常に多く、意味用法が多岐にわたっているので、注意を要する。
 ○ respective は for, belonging to, each of those in question (各自の；それぞれの) の意。
 ○ respecting は、respect の現在分詞で「～を尊重〔尊敬〕する」、[～を考慮する] の意で、他動詞であり、前置詞としては concerning；regarding (～に関して) と同意である。
 ○ respectful は showing respect (to) (敬意を示す) で主語は人間がなくてはならない。
 ○ respectable は regarded by society to be good, proper, or correct (社会的に容認された) の意で、これは主語に何でもとれる。ただし、とりたてて「立派な；尊敬に値する」の意味ではないのが普通。
- (7) ○ not more A than B だと、「BほどAでない」の意になってしまって、ここでは用いることはできない。
 ○ ここは no more A than B (AでないのはBでないのと同じ；Bと同様Aでない) (= not A any more than B) が当てはまる。
- (8) ○ what does happen の箇所は、前文の grammar is based on usage を他の表現で示したものであるから、言語に関する限り、この what does happen は usage と書き換えることができる。

- (9) ○ they は、内容的には the laws of any other science でもよいが、ここではダッシュの前の部分を補足説明しており、かつ本文全体のテーマに即して考えると、they = the laws of grammar と答えるべきである。the laws だけでは不十分。

全訳

標準英語というのは、教育を受け、社会的地位のある人々によって、概して使われている英語のことである。そして、それが標準であるのは、そのような人々が、それを使うからという理由にすぎない。もし我々が、いわゆる「完全な英語」という不可思議な観念をなんとか首尾よく取り除くことができるならば、我々は今よりはるかに英語を早くうまく使えるようになるであろう。まったく、そんなものはありはしないのである。我々の最も優れた話し手でも、誰もが同じように言葉を使っているわけではないのである。

50年昔には、言葉の正しい使い方のための規則を規定するのは、文法家の義務であり、その規則に従うことが、その他すべての人々の義務であると漠然とではあるものの、一般に信じられていた。この信念は完全に消えてしまったわけではないが、もはやまともなものとは考えられてはいない。言語学者たちは、今日、「文法は現実の用法に基づいている」、そして、化学者には分子がいかに関相互作用すべきか述べる権利がないと同様に、文法家には、いかに人々は話すべきか述べる権利はないということに、一般に意見が一致している。文法の法則は、他の科学の法則と同じで、現に起こることについての法則化された言説にすぎず、起こるべきことについての指示ではない。—そして、それらは何か新しい証拠が現れるとすぐ変更されざるをえないものである。

注

- ℓ.1 ◇ the kind of English that … : that は関係代名詞で先行詞は a kind of English.
○ the kind [type ; sort] of A that ~ 「～の類のA」

[3]

解答

- (1) **d** (2) **g** (3) **f** (4) **e** (5) **a** (6) **b**
(7) **c [h]** (8) **k** (9) **h [c]** (10) **j** (11) **i**

解説

- (1) 「私が欠席したのは病気のためだった。」
‘理由’を表す接続詞で強調構文をとるのは because のみ。
- (2) 「今はもう我々だけなのだから、自由に話をするができる。」
○ now that … 「今はもう…だから」
- (3) 「彼は年をとっているが、彼の足どりは相変わらずまだしっかりしている。」
○ 形容詞 + though + S V 「Sは…だけれども」
as にもこの用法があるが、(5) で as を用いるのでここでは though。
○ as ~ as ever 「相変わらず～」
- (4) 「彼と上手くやっていくことは、不可能ではなかったにしても、難しかった。」
○ if (it was) not impossible 「不可能ではなかったにしても」 ‘譲歩’を表す if。
○ get along with ~ 「～と上手くやっていく」

- (5) 「彼は頭がよいのだから、もっと学校の成績がよくてもしかるべきだ。」
 ○ 形容詞 + as + SV 「Sは…なので」
 ○ ‘譲歩’ と ‘理由’ の意味があるので文脈で判断する。
 ○ intelligent 「知能の高い」
- (6) 「見渡す限り、街は火の海だった。」
 ○ as far as ～ 「～の限り」 ‘範囲・制限’ を表す。
- (7) 「我々が会う時間までに戻って来る限り [という条件で]、君はどこへ行ってもよい。」
 ○ so long as … = provided (that) … 「…の限り」
- (8) 「もし列車に乗り遅れたら、どうしようか。」
 ○ supposing (that) … 「もし…なら (どうするか)」
- (9) 「費用を払ってくれるなら、私は喜んで行きます。」
 ○ provided (that) … = so long as … 「…という条件で」
 ○ expense 「費用」
 ○ be willing [ready] to … 「喜んで…する」
- (10) 「彼の勇気は我々皆が彼を敬服するほどのものだった。」
 ← 「彼は非常に勇敢だったので我々皆が彼を敬服した。」
 = Such was his courage that we all admired him.
 ○ such ～ that … 「非常に～なので…」
 = He was so courageous that we all admired him.
 ○ S is such that 節 「Sは…するほどのものである」
 ○ admire ～ 「～を敬服する」
- (11) 「私は部屋が暖かくなるように火を灯している。」
 ○ so that S will … 「Sが…するように」 ‘目的’ を表す。

【4】

解答

- (1) c (2) d (3) b (4) f (5) e (6) i
 (7) l (8) h (9) g (10) j (11) a (12) k

解説

- (1) ○ at one time 「かつて；昔」 [= formerly]
 (2) ○ both to reign and to rule
 (3) ○ as soon as … 「…するとすぐに」
 (4) ○ for ever 「永久に」
 (5) ○ even though [if] … 「たとえ…でも」 ‘譲歩’ を表す。
 (6) ○ in practice 「実際問題として」
 (7) ○ whatever proposals ‘複合関係形容詞’ の whatever (…するものは何でも)。
 (8) ○ have ～ in mind 「～を計画中である」
 (9) ○ in case … 「…だといけないので；…する場合に備えて」
 (10) ○ none the less 「それでもなお」 (= nevertheless)

(11) ○ as far as S is concerned 「Sに関する限り」

(12) ○ rather than ～ 「～よりむしろ」

全訳

英国の君主は (1) かつて 君臨と支配を (2) ともに行う ことを期待された。しかし政党政治が確立する (3) とすぐに, 君主の実権は (4) 永遠に消え去った。理論上はいまだに国家の最高権力だった (5) としても, (6) 実際には, 国民が民主的権利を脅かされていると思う (9) ことがないように, 政府の (8) 考える 提案には (7) いかなるものにも 同意することが期待された。(10) それでもなお, 少なくとも民衆の関心 (11) に関する限り, 英国王室の影響力はある面では以前と変わらず大きい。王室は、暇のある無益な生活に身をゆだねる (12) よりむしろ, 国民に奉仕するという姿がたいいていの人に好意をもたれるということを賢明にも悟り, そうすることに決めたのである。

[5]

解答・解説

(1) unless

「一生懸命勉強しないと失敗すると彼に注意した。」

○ 命令文, or ～ 「…しなさい, さもないと～」

cf. 命令文, and ～ (…しなさい, そうすれば～)

○ unless … 「もし…でなければ」

(2) fact that

「私たちは次のバスを1時間待たなければならず, ととてもいらいらした。」

○ the fact that 節 「…という事実」 that は ‘同格’ の名詞節を導く接続詞。

(3) but, as well

「彼女は忠告をしてくれたのみならず, お金もくれた。」

○ A as well as B = not only B but (also) A = not only B but A as well 「Bのみならず A」

(4) With

「咳をするたびに彼女はかなりの痛みを感じた。」

○ Each [Every] time S' + V', S + V = Whenever S' + V', S + V 「S' が V' するたびに, S は V する」

○ () every cough S + V という構造なので, () には前置詞が入る。‘原因・理由’ の with を入れると慣用的にも正しい文となる。

【6】

解答

- (1) **b** (2) **c** (3) **c** (4) **d** (5) **a** (6) **b**
 (7) **d** (8) **c** (9) **b** (10) **d** (11) **d** (12) **b**

解説

- (1) 「ある文化では、来世は幸福と繁栄の新しい生活としてみなされているので、葬式では派手な色が常に着てもよい色となっている。」
a but だと文意が不自然。
b so 「そこで」‘結果’を表す接続詞。
c, d for (等位接続詞), because (従属接続詞) は‘理由’を表すが、「来世が幸福と繁栄の新しい生活と考えられているのは、葬式で派手な色が着てもよい色であるから」となり因果関係が逆になってしまう。
 ○ hereafter 「来世」
 ○ think of A as B 「A を B とみなす」
- (2) 「このコンピュータは強力で、効率がよく、使いやすい。しかしながら、値段が高すぎる。」
a although = though 「～だけれども」‘譲歩’を表す接続詞。
b despite (前置詞) 「～にもかかわらず」
c however 「しかしながら」
d whether or not 「いずれにしても」 = in any case
- (3) A: 「天気の良い日だね。」
 B: 「ええ、けど少し寒いわ。」
b in spite of ～ 「～にもかかわらず」
c though 「でも」文尾または挿入的に用いる副詞。
 ○ although には副詞の though のような用法はないので、この場合は不可。
- (4) 「このビルは消防の検査に通らなかった。それゆえ年の終わりまで閉鎖される予定だ。」
a nevertheless 「それにもかかわらず」 (= however; nonetheless)
c since 「～以来; ～なので」‘時’や‘理由’を表す。
d therefore 「それゆえに」
 ○ pass ～ 「～に合格する」
 ○ for the rest of the year 「その年の残りの間」
- (5) 「彼女があなたの言っていることを信じているのは確かだ。」
a that 「…ということ」の意で名詞節を導く。
 cf. be certain that 節 (～は確かだ)
b, c, d は文が成り立たない。
- (6) 「彼は授業に来ると思うか。」
 「彼が来るか来ないかなんて僕には関係ないよ。」
b whether A or not 「A であるかないかということ」ここでは名詞節になっている。
c if he comes or not は目的語の節に用い、主語の節にはなれない。

- (7) 「雨が降ろうと降るまいと、藤田はピクニックを催すつもりでいる。」
- a** as to whether it rains or not 「雨が降るか降らないかということに関しては」という意味になり、文意が不自然。
- b, c** depend は自動詞なので、depend on [upon] ~ (～による) の形で用いる。ただし、口語では on [upon] は省略されることもある。
- d** whether A or not 「Aであろうとなかろうと」ここでは‘譲歩’を表す副詞節になっている。
- (8) 「花子はもはや、ほとんど友達とさえも遊びに行かない、今では結婚して2人の子供がいるからだ。」
- a** as soon as … 「…するとすぐに」
- c** now (that) … 「今では…なので」
- d** in case … 「…の場合は；…するといけないから」
- hardly ever 「ほとんど…しない」 ever は強調。
- (9) 「私たちは予期していなかっただけに一層うれしかった。」
- a** more と比較級があるので安易に than だと思っはいけない。
cf. She was *more* delighted *than* I had expected.
(彼女は私が予期していた以上に喜んだ。)
- b** all the 比較級 because [for] ~ 「～なのでより一層…」
- (10) 「非常事態の場合、他の指示がなければできるだけ素早く建物から離れなさい。」
- d** unless (you are) otherwise instructed
- unless … 「…の場合を除いて」‘条件’を表す。
- otherwise (副詞) 「違ったふうに」
- in case of ~ 「～の場合は」
- (11) 「あの人たちに何1つばかなことを言いたくなかったので、私はまったく一言も言わなかった。」
- d** so … that ~ 「非常に…なので～」
- I was so anxious not to say anything ~ . の so anxious が文頭に出て倒置が起きたもの。
- be anxious to … 「…することを切望する」
- never ~ anything at all = nothing at all
- (12) 「彼は実際に我々の計画について何も知らなかったのに、まるでそれらについてすべて知っているかのように話した。」
- b** as though [if] + 仮定法過去 「まるで～であるかのように」
- when 「～なのに」‘対照・譲歩’を表す。

【7】

解答・解説

◆は『解体英熟語 改訂第2版』の参照番号を示す。

- (1) (A) longs (B) for ◆200
 ○ long for ~ 「~を切望する」
 ○文中の but は否定文中の語を先行詞とする関係代名詞で that … not (…しないところの) の意味。
- (2) (A) account (B) for ◆203
 ○ account for ~ 「~の理由を説明する」
- (3) (A) answer (B) for ◆205
 ○ answer for ~ 「~に責任を負う」
- (4) (A) make (B) for ◆207
 ○ make for ~ 「~に役立つ；~に進む」
- (5) (A) counts (B) for ◆209
 ○ count for ~ 「~だけの価値がある」
e.g. count for little [nothing] (ほとんど〔まったく〕重要ではない)
- (6) (A) aiming (B) at ◆212
 ○ aim at ~ 「~をねらう」
- (7) (A) live (B) on ◆216
 ○ live on ~ 「~を常食とする」
- (8) (A) act (B) on ◆218
 ○ act on ~ 「~に作用(影響)する」
- (9) (A) tell (B) on ◆219
 ○ tell on ~ 「~に効き目がある」
- (10) (A) got (B) on ◆223
 ○ get on *one's* nerves = give *one* the nerves 「人の神経にさわる」
cf. have the nerves to … (あつかましくも…する)
- (11) (A) hit (B) on ◆224
 ○ hit on ~ 「(人が) ~を思いつく」
- (12) (A) reflected (B) on ◆225
 ○ reflect on ~ 「~を熟考する」
- (13) (A) dwelt [dwelled] (B) on ◆226
 ○ dwell on ~ 「~について長々と話す〔書く〕」
- (14) (A) count (B) on ◆229
 ○ count on ~ 「~を頼りにする」
- (15) (A) Hang (B) on ◆232
 ○ hang on 「待つ；電話を切らずにおく」
 ※この意味で hang on を用いるのは、イギリス英語の用法。アメリカ英語なら hold on。
- (16) (A) came (B) across ◆237

- come across ～ 「～に偶然出くわす」
- (17) (A) go (B) into ◆ 240
 - take the trouble to … 「わざわざ…する」
 - go into ～ 「～を詳しく調べる〔論じる〕」
- (18) (A) get (B) over ◆ 246
 - get over ～ 「～を乗り越える；～から立ち直る」
- (19) (A) takes (B) after ◆ 247
 - take after ～ 「～に似る」
 - ※目的語は、親・祖父など年上の直系親族を表す語に限られる。
 - 「彼女は私の母に似ている。」
 - × She takes after my mother.
 - She looks like my mother.
- (20) (A) set (B) about ◆ 248
 - set about ～ […ing] 「～ […すること] を始める」